

個体と普遍のはざままで  
中村信一少年の「人生の答案」

金沢大学附属図書館長  
柴田正良

まずはこの随筆集『ボツリヌス菌を訪ねて』の中で、中村信一学長自らの手になる「略歴」を見てほしい。筆者の少年・青年期の伸びやかな姿と、それをいま振り返る眼差しの軽妙さが光る。これは紛れもない、他に代えようのない、一つの個性である。

かつてイギリスの思想家ジョン・スチュアート・ミルは、ドイツの大学者ウィルヘルム・フォン・フンボルトの口を借りて、個性の重要性をこう説いた。

したがって、「すべての人間がたえず努力を向けなければならない目標、他人に影響を与えようとする人であればとくに目を離してはならない目標は、能力と発展における個性である」。その目標を達成するには、「自由と状況の多様性」という二つの条件が必要であり、この二つが結合して「個人の活力と多様な変化」が生まれ、この両者から「独創性」が生まれる。(ジョン・スチュアート・ミル『自由論』山崎洋一訳、光文社古典新訳文庫、一三〇頁)

大空に龍のように暴れるムクドリの大群や、海中で一瞬に塊を大きく変えるイワシの大群の中では、個体相互の違いはほとんど無きに等しいものであろう。人間は違う、と声高に言いたい、もし地球上の人類の行動を一万年ほど宇宙から観察したら、その知的生命体は、人間同士の個性の違いもまたムクドリやイワシのそれと大差ないと見るかもしれない。しかしそれでも、人間の個体差が地上において比類なきものであるのは疑いない。人類が一つの種として存在するにはそれに属する個体群を貫く普遍が存在しなければならない。個体差としての個性は、普遍の圧力に逆らう力であり、それを偶然が創り出す。

この随筆集の中で人は、一人の典型的な「知識人・大学人の人生」という人間の普遍的パターンと同時に、その普遍から時代や状況や偶然が切り出す、代替不可能な個性に出会うことであろう。一言でいえば、かつて教室で友人の「旅の友」(ふりかけ)をうらやんだ小学一年生の中村信一少年は、個体と普遍のはざままで成長し、悩み苦しみ、多くの喜びを知り、時に訪れる身近なものの死に涙したのである。この「人生の答案」を、身をもって書き上げている間、ひとときも中村信一という個性を失うことなしに…

私もまた、中村学長の関わった小さな偶然の一つである。人文学類長であった当時、附属図書館長でもあったためか、金沢大学創基 150 年記念事業の準備委員会委員長の任を学長より与えられ、そのおかげで、教員としては希なさまざまな出会いや出来事を経験させて頂いた。そのなにかがしかの影もまた、薄くはあれ、随筆集の中に映り込んでいる。

- 1 さて、どの作品がどうなのかを述べる読者としての私の「独断と偏見」も、私の重要な個性の一つだと許して頂けるだろうか。私の印象に強く残ったのは、まず、中国を始めとする、ボツリヌス菌採取の旅の話である（その中には、毒性細菌が密かに練る、人類との共存戦略という哲学的なテーマもある）。次いで、家庭菜園での奮闘記（なかでも、シナンタロウの逆襲を受ける筆者の姿が秀逸）。さらに、敦煌、サンタ・クロチェ教会などにまつわる偶然の話（人はだれでも、これほどの偶然に恵まれるものだろうか？）。そして、夏山診療のための白山登山の様子である（淡々とした描写が、かえって登場人物たちの風貌を活写する）。しかし、私が最も心打たれたのは、「愛犬セラ」の話である。その内容は紹介すまい。みなさんに直に読んで頂きたい。筆者の微妙な心の動きが、そのまま、ときに厳しい「学長」の真の姿なのであろう。

もちろん、誰もがこれほど素晴らしい「人生の答案」を書けるわけではない。しかし、それもまたよいではないか。それが、その人なりの個性ある「人生の解き方」である限りは……

随筆集『ボツリヌス菌を訪ねて』に「賛」を捧げるために記した。

平成 26 年 1 月 30 日